



ナガサキ ピース・タイムズ

発行者【THE PUBLISHER】
日本非核宣言自治体協議会
(にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい)
〒852-8117 長崎市平野町7番8号
長崎市平和推進課内
電話:095-844-9923 FAX:095-846-5170
E-mail:info@nucfreejapan.com
ホームページ:http://www.nucfreejapan.com

NAGASAKI PEACE TIMES

【非核協】おやこ記者新聞



戦争・核兵器のない世界

わたしたちの希望に向かって

～長崎で学んだ平和の種をまこう!育てよう!～



令和6年11月23日〜24日開催の「地球市民フェス」で実行委員を務める、長崎大学核兵器廃絶研究センター客員研究員の林田光弘さんにお話を聞きました。このフェスでは長崎の人たちが大切にしている『人を敵味方に分けて、違いを尊重して楽しむを分かち合う』という心が反映されています。人種や言葉の違いを超えて、みんなが音楽やアートや趣味でつながり、仲



「好き」が世界を救う
〜長崎大学核兵器廃絶研究センター客員研究員 林田光弘さん〜

若者がつくる 未来の平和
平和のためにできることはたくさんあります。自分が好きな芸術やスポーツを通して平和への思いを表現することもできます。今、被爆者からの平和のバトンを受け取った若い世代が、それぞれのやり方で平和を発信しています。その取組みについて全国から長崎に集まった9組の親子が取材しました。

よくするフェスです。ぼくも〇〇人とか関係なく、同じ地球市民として接していけるようになりたいと思いました。他にも、好奇心を持つことが世界の平和につながることも知ったので、もっと好きなことを追求していきます。それが世界のみんなや地球そのものを愛することにつながるからです。

【西澤快人・昇子記者】



戦争体験者、被爆者の思いをもっと世界へ発信したい



原爆資料館学芸員の高倉大輔さんにお話を聞きました。いずれいなくなってしまう戦争体験者、被爆者の思いを日常の中でより多くの人に伝えていきたい、もっと世界へ発信していきたいという思いから学芸員になったそうです。

長崎に来て一番驚いたことは、一人ひとりが地球市民として真剣に平和について考えていて、熱量

～長崎原爆資料館学芸員 高倉 大輔さん～



いるんだと私は思いました。平和について考えている人達が、居続けること自体が核保有国への牽制になるかと話してくれました。この長崎の熱量が全国へ広がるといいなと思います。

【山本聖奈・友子記者】

がまったく違ふと感じたことでした。小さい頃から平和について考える機会がたくさんあることで、79年前の戦争をより身近に感じて

若者がつくる未来の平和

～永遠の会 U-25 岩永 陽美さん～



国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の朗読ボランティア「被爆体験を語り継ぐ永遠の会」が令和5年に新設した若者朗読サポーター「永遠の会 U-25」で活動される岩永陽美(18)さん取材しま



原稿朗読の練習を重ね、情景に合わせて低めの声で話すなどの工夫をしているそうです。「全てが伝わらなくても、亡くなった方々の思いが一つでも伝わり、原爆や戦争を考える機会になってほしい」と願っています。

私は、被爆者の思いを多くの人

した。様々な世代に受け入れられやすいよう音楽と被爆体験記を融合する企画で朗読予定です。岩永さんは、

【三ツ愛実・宏美記者】

未来の平和



平和はみんなの願い

～サークルK長崎大学 末廣 万葉さん～



爆心地公園のそばを流れる川で、平和のメッセージや絵をかけた紙灯籠を流して平和を祈る活動をしているサークルK長崎大学の末廣万葉さんに話を聞きました。末廣さんは広島県出身で、いまは長崎大学で学び、同じ被爆地ということで、子どもが子どもらしくすこ

多く、どの国の人も平和を願っていると感じるそうです。でも平和のイメージを質問すると、住む国によって少し答えが違ふという話も聞いてびっくりしました。私は末廣さんの話を聞いて、世界で平和への思いは共通しているのだから、みんながわかり合える世界になってほしいと思いました。

【新城沙弥・貴盛記者】



せる社会にしたいという思いで活動しているそうです。世界から届くメッセージや絵はLOVEやスマイルといったものが

大学生たちが被爆者証言を英語で発信

長崎の平和を願い被爆者の声などを発信している「MICHISHIRUBE(ミチシルベ)」という団体取材しました。立ち上げメンバーの一人、羽山嵩裕さん(19)は明治学院大学は長崎県で過ごす高校生時代に高校生平和大使として活躍。その経験を活かし、思いをともにする大学生メンバー約20人と被爆者の証言などを発信しています。英語字幕付きの動画で世界に向けて発信



写真左：羽山さん

～MICHISHIRUBE 羽山 嵩裕さん～

しているほかに、オリジナルデザインのパックやTシャツを売って活動資金を集めています。羽山さんは祖母の兄が被爆し、亡くなりました。毎夏その話を聞いて悲しむ祖母の影響で平和のための活動を始めました。思いをともにする仲間とともに語り部と交流しています。たくさんの応援の声を励みに、温かく前向きな羽山さんたちはキラキラと明るく平和な未来をつくるべく、思いを込めて発信しています。

【川戸椿・佳織記者】



祈りの花瓶 変形してしまったビン達

僕は毎熊那々恵さんに話を聞きました。毎熊さんは、土の中から見つかった原爆の熱風で変形してしまったビンの形を3Dプリンターで写し取って「波佐見焼」で再現しています。それはアート作品「祈りの花瓶」として展示されたり売られたりしています。ピンを



~Vace to Pray Project 毎熊 那々恵さん~

飾ったり花瓶として日常的に使ったりしてもらって、原爆のことを世界中のたくさんの方が知ることができるようになってほしいと言っていました。特に実現が難しいアメリカでの展示を目指しているそうです。

僕は、熱風でビンが変形してしまっただけで、割れなかったのかを調べてみたいと思いました。



【菅井篤実・由子記者】

「平和の反対は？」

~ISSOKU 只熊 ゆりさん~

私は、ISSOKUの只熊ゆりさんにお話を聞きました。「平和の反対はなんだと思いますか」と聞くと、只熊さんはある学者さんの話を例に話をし、「私は平和の反対は『暴力』だと思えます。ある学者さんは『暴力は三つに分かれていて、叩く・殴るな



どの直接的な暴力、差別や貧困などの構造的な暴力、選挙に行っても何も変わらないと思うような文化的な暴力』と言っています。私もこの話から、平和の反対を暴力だと思っています。」と言っていました。私は文化的な暴力がエスカレーターとして、テロリストになっていくのかなと思ったし、世界を全て平和にするのは難しいけれど、一人ひとりの小さな幸せが増えていくと、とてもいいなと思いました。

【吉田彩夏・順子記者】



若者がつくる

平和の伝え方について

~家族・交流証言者 原田 晋之介さん~

ぼくは、家族・交流証言者の原田晋之介さん取材しました。原田さんの曾祖父は広島と長崎で、二重被爆されたそうです。原田さんにとって曾祖父が二重被爆していることは、幼いころから身近にあり、特別なこととは思っ



ていかなかったそうです。小中学生の時に原爆について学習して初めて二重被爆がめずらしいと知ったそうです。原田さんは小学5年生の時から紙芝居を使って「平和の伝え方」はいろいろな方法がある」と思って活動をしているそうです。ぼくも平和について、周りの人に伝えるにはどんな方法がいいか考えていききたいと思います。



【中山翔太・文記者】

「あなたにつなぐ」から「あなたがつなぐ」へ



写真左：北川さん
写真右：登立さん

私は、チンドン屋さんをテーマにした平和紙芝居を広める活動をしている、長崎県立長崎西高校放送部2年の北川瑠夏さんと登立愛来さんにお話を聞きました。いつも受け身で平和学習を受けていた2人は、自ら行動して子どもたちに平和を伝えることができるのではないかと考えたそうです。戦争が怖いというイメージをもつ子どもたちにも、

~長崎県立長崎西高等学校 北川 瑠夏さん 登立 愛来さん~

この紙芝居の内容ならわかりやすく明るく伝えることができると思ったそうです。実際に2人は小学校に行き、難しい言葉はわかりやすいクイズにするなど、より伝わりやすく工夫して上演したそうです。私たちは、2人の活動を通して子どもたちが戦争や平和に興味をもつことで、平和の心を「あなたにつなぐ」から「あなたがつなぐ」につなげていくのだと感じました。

【谷口心音・三千代記者】



5歳で原爆孤児に 忘れられないピカッ!ドン!

ぼくは、落下中心地から2・5キロメートル離れた所で5歳で被爆した木口久さん(84)を取材しました。お母さんは、女手一つで5人の子育て中でした。お腹のすく子どもたちのため、食糧の買い出しに行ったまま被爆し、亡くなりました。それがお母さんを見た最後でした。

残された5人の子どもは屋内で無事でした。地面近くを飛ぶB29。ピカッという光の後、ドン!とときて屋根が吹き飛ばされたことが忘れられないそうです。



79年前の昭和20年8月9日、原子雲の下に暮らしていた9名の被爆者。 厳しい惨禍をくぐり抜け、原爆症や差別に苦しみ、戦後を生き抜いてこられました。その貴重な被爆体験をご本人に語っていただきました。

被爆の被害は何年もたってから現れる

はしもと とみたるう
橋本 富太郎さんの体験談



ぼくは、橋本富太郎さんに取材をしました。橋本さんは西小島町で2歳の時に被爆したそうです。

爆心地から4キロメートル離れていたのに、火傷などの目に見える被害はなかったそうです。小学生ごろになるとけがをした傷の治りが悪く化膿したそうです。中学生のころは腎盂炎になったり骨折したりしたそうです。

被爆から20年ほどすると同級生が急

性白血病で亡くなったそうです。その後、自身も被爆50年で大腸がんの手術を受けたそうです。

お話を聞いて、被爆したことの被害は目に見えるものだけではなく、何年もたってから病気として現れるものだと知りました。

【中山翔太・文記者】



木口 久さんの体験談



終戦後は孤児院に。親戚宅で厄介者扱いされ続けたお姉さんは命を絶ちました。

木口さんは言います。戦争の行き着くところは核を持つことになりま。それより戦争をなくすこ

とを考えましょう。相手を非難したり分断したりせず、お互い許し合って平和を築いて武器を手放していきましょう。

【川戸椿・佳織記者】



突然の被爆 一口しか 食べられなかったおにぎり

いけだ みちあき
池田 道明さんの体験談



ぼくは池田道明さんに話を聞きました。池田さんは当時6歳でお母さんの職場(長崎医科大学附属病院)の屋上で遊んでいました。エレベーターで下に降りて1階に出たときピカッと光って、目の前が真っ白になり気がついて、目の前が真っ白になり気がついてたら倒れていました。パチパチという音と煙で山に逃げたそうです。その後何日かして、隣町から来た人たちがおにぎりを配ってくれましたが、池田さんは一口食べてあとは食べる気がしなかったそうです。

ぼくは、おにぎりをもらったのに食欲がないことにびっくりしました。不思議だなあと思いました。なぜ原子爆弾を受けたあとと食欲がなくなるのか調べてみたいと思いました。

【菅井篤実・由子記者】

戦争は

「無関心の代償」

私たちは、松本美都恵さんに3歳の時の被爆体験を取材しました。被爆当日、美都恵さんは疎開するために朝の6時半からお母さんにおんぶされて疎開先の長与村高田郷百合野に向かいました。

そして、疎開先に着いてお母さんが美都恵さんを降ろそうとした



時に被爆しました。お母さんは目と耳を押さえ家に飛び込んだそうです。

美都恵さんは「18歳になったら平和を大切にすることに投票してほしい」と強く言っていました。私は平和に関心がない人、ある人、自分も含め平和のことを考えれば、より平和のことが分かって世界がより良くなると思います。

【吉田彩夏・順子記者】





思いやりの心で 争いのない世界へ

私は、当時9歳で被爆し、被爆体験の語り部をしている羽田麗子さんにお話を聞きました。羽田さんは、原爆が落とされたときのことを写真を交えて話してくれました。また、海外での体験も話してく

はだれいこ 羽田麗子さんの体験談

れました。現地では「日本人は原爆の話をするけれど、戦争は日本がしかけたもの」と言われたそうです。でもお互いたくさん話をし、分かり合い仲よくなったそうです。羽田さんは「一人ひとりの命は一つだけだから粗末(そまう)にしてはいけない。相手の命も大切に、いじめや差別はしない。問題があるなら話し合いで解決することが大事」と伝えてくれました。原爆は多くの命を一瞬で奪うので、私は核兵器のない誰もが幸せになる世界になるよう願っています。

【新城沙弥・貴盛記者】



本当の戦争は日常ではない場



ほりた たけひろ 堀田武弘さんの体験談

私たちは、当時3歳10か月で被爆した堀田武弘さんにお話を聞きました。堀田さんはあの日、兄弟で遊んでいた空襲警報(くうしゅうけいほう)を聞きました。そして姉が爆風(ばくふう)だけがをしました。堀田さんは3歳だったけど自分で防空壕(ぼうくうごう)まで逃げられたそうです。その時に大事にしてい

たコンクリートの赤いリンゴのおもちゃをなくしたそうです。堀田さんの話では、当時は自由にいろいろなところに行つて遊んだりできないのに、家にあつた金属製(きんぞくせい)のおもちゃまで国に回収されてしまい遊べなくなつたそうです。私は、資源が足りないからといって、国民の生活で使う金属まで回収をしてしまふのはちがうなと思います。これからは、子どもやいろいろな人たちが戦争で苦しむことがないような世界になつてほしいです。

【谷口心音・三千代記者】



早く被爆者の方々が笑顔になれる日を

かど たかし 門隆さんの体験談



私は、門隆さんにお話を聞きました。

爆心地から約4キロメートル離れた自宅の外で遊んでいる時に、9歳で被爆しました。学校に行つていたお兄さんは校庭で被爆した後「水ばあー水ばあー」と言つて亡くなりました。仕事に行つていたお父さんは夜に帰つて来ましたが、口も目も開けられない状態で苦しんで、一言も話せないまま夜中に亡くなりました。食べるものが本当に少なく、兵隊さんを見送りに行くともらえるおにぎりをお母さんと譲り合つて食べた話を、涙ながらに話してくれました。79年経つた今も、話すと涙が出てしまうほど辛く、厳しく、悲しい出来事だったんだと感じました。核兵器をなくして、門さんたち被爆者の方々が笑顔になれる日が早く訪れるといいなと思えました。



【山本聖奈・友子記者】

被爆者から子どもたちへ 「あなた達がよく考えてください」



まつお さちこ 松尾幸子さんの体験談

私は、被爆したとき11歳だった松尾幸子さん(90)を取材しました。松尾さんは爆心地から1・3キロメートル離れた岩屋山で被爆しました。その時は他人を助ける余裕はなく、家族を探すのに精一杯でした。松尾さんは無傷で

したが、爆心地近くにいた家族6人を亡くしました。松尾さんは自分が生き延びて、死んでしまった人に申し訳ないと思つていましたが、子どもや孫に会えて生きる喜びを感じたそうです。戦争は勝つても負けても幸せにはなりません。自分の国を自分で考えて守ることが大切です。そのことを少しでも伝えていくと大きな輪を作れます。家族が一緒にいることは幸せなことで、私は当たり前のように家族揃つて過ごすことがどんなに幸せか気づかされました。

【二シ愛実・宏美記者】



石ころ以外は何でも食べられる!?

ぼくは、1歳の時に被爆をした岩永芙美子さんにお話を聞きました。

いわなが ふみこ 岩永芙美子さんの体験談

につけている物を農家の野菜と交換していたそうです。ぼくはそれを聞いて今の日本がどれだけ平和か知りませんでした。食べられないことはすごく辛いことだと思いました。



岩永さんは最後に『絶対に3回目の核を使わないこと。戦争をしないこと。戦争の悲惨さを忘れてはいけないこと』を教えてくださいました。ぼくは一人でも多くの人にこのことを伝えたいと思えました。

【西澤快人・昇子記者】

東北代表

宮城県 気仙沼市

吉田 彩夏・順子 記者

昭和20年8月9日、長崎に原子爆弾が投下された同日正午頃、三陸沿岸を艦砲射撃と空襲が襲いました。

釜石市に住んでいた祖母の武子が8歳の頃、曾祖父の岩淵清巳は釜石捕虜収容所で捕虜の管理に当たっていました。田舎でも食糧難でしたが、オランダ人捕虜を自宅に招いて食卓を囲んだこともありました。しかし、終



祖母 武子さんと

捕虜 ～戦争で敵に捕らえられた人～



当時の写真
前列左から2人目が曾祖父

戦後、管理者であった曾祖父は、戦犯として巣鴨拘置所に3年間服役しました。

釜石捕虜収容所の捕虜への人道的な対応があったとする捕虜の証言や関係記録等が服役期間を短くした要因と考えられます。

曾祖父が、なぜ捕虜に優しできたのかを知ることによって、和について考えたいと思います。

釜石郷土資料館や旧釜石鉱山事務所、北上平和記念展示館へ足を運んでいます。

北海道代表

北海道 旭川市

菅井 蕙実・由子 記者

旭川と はげしかった戦争



北鎮記念館

ぼくは旭川市にある北鎮記念館に行きました。そこで、旭川から多くの兵士が戦争に行ったことを知りました。日露戦争では勝利を決めた戦いで大活躍したそうです。しかし、太平洋戦争では南方の暑いガダルカナル島や、「玉砕」といつて全めつした北方のアッツ

島などのきびしい戦いに参加したそうです。その時に行き先も知らされずに戦地に向かった兵士の手紙にビックリして、戦争に行かされるのは嫌だと思いました。戦争が起きたら大変だと思いました。



館内の展示物

関東代表

埼玉県 行田市

山本 聖奈・友子 記者

令和6年の夏 広島・長崎への原爆投下と 終戦から79年 「戦争」と「平和」について、 私たちの住む地域で 調べ、学び、考えました 全国9組18名のおやこ記者が それぞれの住む地域を 取材したレポートです。



授業体験

私は埼玉ピースミュージアムに行きました。戦時中の学校教室や防空壕が再現してあり、いつ空襲がくるのか緊張しながら大東亜共栄圏や兵役義務について(体験)授業を受け、空襲警報が鳴ってから暗くて狭い防空壕に入りました。とても怖かったです。

79年前の子どもたち 埼玉ピースミュージアムで感じたこと



防空壕体験

日の中、軍人になるために学校に行っていたこと、6年生の平均身長が5年生の私よりも低く、栄養状態が悪かったことなどを想像すると、今の私と違いすぎて悲しくなりました。

初めて知ることばかりだったので、もつとたくさん知って、二度とこんなに悲しいことを起こさないよう、伝えていきたいと思いました。

畿代表

大阪府 八尾市

中山 翔太・文 記者

ぼくたちが住む大阪府には、原子爆弾投下の訓練のために模擬原子爆弾が投下されました。

そのことについて調べたため、模擬原子爆弾が投下された付近の慰霊碑がある恩楽寺と、ピースおおさか(大阪国際平和センター)に行ってきました。

投下訓練は昭和20年7月20日、8月14日まで全国44か所で行われ、延べ49発の模擬原



ピースおおさか

僕たちの住んでいる大阪で起こった戦争



恩楽寺

子爆弾が投下されたそうです。

ピースおおさかでは模擬原子爆弾のことだけではなく、大阪への空襲の様子や被害を受けた街や人の様子が、展示や音声で分かりやすく説明されています。

ぼくは、今後、戦争が起きない平和な世界になつていくことを願っています。

中部代表

静岡県 富士市

西澤 快人・昇子 記者



若獅子神社

ぼくは、富士宮市の「若獅子神社」と、静岡市の「静岡平和資料センター」へ行きました。

神社には戦車があり、数発の弾痕を見て激戦の様子にびっくりしました。

静岡平和資料センターでは、管理人の鈴木龍太郎さんにお話を聞きました。静岡市に10万発も落とされた焼夷弾

戦争の爪痕が教えてくれたこと



静岡平和資料センター

は、わずか2時間で二千人以上、二万五千世帯を焼き払ったそうです。焼夷弾を作る際、(米軍が)日本家屋を建てて殺傷能力を確かめていたことを知り、ぼくは恐怖を感じました。

人がたくさん亡くなる辛さを忘れてほしくないのです、ぼくは地域のみならずにも伝えたいと思いました。

四国代表

高知県 高知市

川戸 椿・佳織 記者



小笠原 勝さんと

ぼくは、高知県室戸市の小笠原勝さん(90歳)をたずねました。小笠原さんは中学校を出て漁師になり、1954(昭和29)年、仲間と太平洋でマグロ船に乗っていた時にアメリカの水爆実験にまきこまれました。原爆の千倍の威力だったそう

1954年のビキニ水爆実験 知られていない高知の核被災者

「ちゃんと説明もなかったし、国は何もしてくれなかった。怒りをおぼえます」と小笠原さんは話していました。町で会った人はこのことをあまり語りませんでした。小笠原さんは元気でやさしい人でした。核実験のことはむずかしいけど勉強していきます。

中国代表

岡山県 岡山市

ニシ 愛実・宏美 記者



小坂妙子さんと

岡上空襲を経験された小坂妙子さん(88歳)にお話を聞きました。当時9歳だった小坂さんは、焼夷弾が落とされたとき、用水路に隠れて生き延びました。火災がひどく、防空壕に入っても熱で助からない人も多くいました。町は戦争孤児であふ

戦争経験者から学ぶ 私たちが守るべき平和



れ、小型飛行機の往来を見て怖く思ったそうです。小学校では芋づるを植え、出征兵士に歌を贈ったそうです。戦争は罪のない人々の夢や希望、未来を奪う恐ろしいものです。今ある日常がどんなに幸せなのか気付かされたとともに、いつまでもこの歴史を風化させてはならないと思います。

令和6年、長崎は昭和20年8月9日の原爆投下から、79回目の夏を迎えました。今年、日本非核宣言自治体協議会(非核協)主催のおよこ記者に、全国から100組の応募があり、抽選で選ばれた9組18名の親子に参加していただきました。

- 1)戦争を体験した方に話を聞いて考えたこと
2)あなたの住む地域にある平和資料館等の施設を訪ねて学んだこと
3)あなたの住む地域で平和を伝える活動をしている人について学んだこと
4)家族で考えた「平和」と「命」の大切さについて

【編集部】



沖縄代表

沖縄県 名護市

新城 沙弥・貴盛 記者

私は、名護市にある津嘉山酒造所が戦争のときアメリカ軍に利用されたとき聞いたので訪ねてみました。杜氏の秋村英和さんが案内してくれました。塀には銃弾のあと、建物の中にはアメリカ軍が書いた落書きが今でも残っているのを見てびっくりしました。落書きに名前もあって、秋村さんは「戦地で家族のことを思って書いたかも



酒造所内の見学

相手を思いやる心で平和な世界へ



落書き

銃弾の跡

しれないね」と話していました。他にも戦争を体験した近所のたばこ屋のおじいさんから聞いた話も私に伝えてくれました。戦争中は日本人だけでなく、相手の人たちも家族のことを思って戦っていたんだなと思いました。平和な時代だったら銃を向け合う敵ではなく、友達になれたはずなのに。

九州代表

宮崎県 日向市

谷口 心音・三千代 記者



日向市黒田の家臣の特攻艇 震洋の格納壕

私の曾祖母の三原節子(享年90)の話です。生前よく戦争の話をしてきていました。曾祖母は目が不自由な中、当時中学生くらいで戦争を体験しました。当時は大分県の北ノ浦というところに住んでいたらしく、両親が仕事中に空襲警報がなると、目が見えなかつたため、防空壕にも行け

戦争を体験した曾祖母に話を聞いて考えたこと



日向市神風特攻隊攻撃隊出撃の地

ず怯えていたそうです。障がいを持った方々の戦争生活は、制限の中、支えてくださる方の手がないと生きていくことが健康者の方たちに比べてさらに難しかったのだと感じました。曾祖母は目が見えない分、他の四感が鋭く気配や空気や物事を察していくことができているように思います。今回戦争を学ぶ中で、障がいのある方にとつての戦争についても触れていけるといいなと思いました。

後編 編集集



事務局だより

今年度は、飛行機の欠航・遅延によるトラブルがありました...

北海道 旭川市

菅井 薫実・由子 記者

思っていたよりもはかりしれない影響



ぼくは、戦争は嫌だなと思いましたが...

北東代 宮城県 気仙沼市

吉田 彩夏・順子 記者

私たちにもできることがある



私が一番心に残ったことは、「私たちにできることがある」ということ...

東代 埼玉県 行田市

山本 聖奈・友子 記者

長崎で学んだことで、平和の種まき



私たちが地球という大きな一つのまちに住む「地球市民」です...

中部代 静岡県 富士市

西澤 快人・昇子 記者

長崎県つてかっこいい



今回、僕の想像を超えて体験をたくさんしました...

畿東代 大阪府 八尾市

中山 翔太・文 記者

平和について考えていきたい



ぼくは長崎で原爆の恐ろしさを学びました...

国東代 岡山県 岡山市

ニシ 愛実・宏美 記者

平和は「笑顔で過ごせるあたり前の日々」



私は今回、参加して紛争のことを一人ひとりが伝えて知っていくことで社会は「本当の平和」に近づいていくと思えました...

四代 高知県 高知市

川戸 椿・佳織 記者

ぼくたち日本人が平和を願いたい!

今回自分が取材し、改めて本当に戦争はだめだと感じました...



九代 宮崎県 日向市

谷口 心音・三千代 記者

当たり前の日常が続く世界でありますように



今回、長崎でのおよこ記者を通して、改めて原爆の恐ろしさ、悲惨さを目の当たりにして、絶対にくり返してはいけないことだと強く思いました...

沖代 沖縄県 名護市

新城 沙弥・貴盛 記者

平和な世界へ

私は、およこ記者を通して、被爆者やたくさんの方に話を聞き、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加するなど、貴重な体験をさせてもらいました...



学生ボランティア 7名がおよこ記者を全力サポート!!

様々な大学から学生が集い、今年も親子と一緒に取材、記事の作成・編集をしました...



長崎純心大学 大学院1年 只熊 ゆり

長崎純心大学 大学院2年 平林 千奈満

国際基督教大学 2年 山口 雪乃

放送大学 1年 山口 花

およこ記者の平和への思い、学びの姿勢が素敵でした。

活水女子大学 3年 下田 ひかり

積極的に学ぼうとする姿勢が印象的でした。

明治学院大学 2年 羽山 嵩裕

子どもとも大人とも色んな話ができよかったです。

長崎純心大学 3年 田淵 颯也